

「資本主義的蓄積の歴史的傾向」

あらゆる利益を横領し独占する大資本家の数の不断の減少とともに、窮乏、抑圧、隷従、墮落、搾取の度が増大するのであるが、また、たえず膨張しつつ資本主義的生産過程そのものの機構によって訓練され結集され組織される労働者階級の反抗も、増大する。

資本独占は、それとともに、かつそれのもとで開花した生産様式の桎梏（しっこく＝足かせ、手かせ）となる。

生産手段の集中と労働の社会化とは、それらの資本主義的外被とは調和しえなくなる一点に到達する。

外被は爆破される。

資本主義的私有の最期を告げる鐘が鳴る。収奪者が収奪される。

月刊社会主義 1990年第316号 10月増刊号 特集 資本主義と社会主義

社会主義への必然性 佐藤保さん

・社会主義への変革を担い実現する人間も資本主義的生産のなかでつくりだされる。『資本論』はのべている。

「この転形過程のあらゆる利益を横領し独占する大資本家の数の不断の減少とともに、窮乏、抑圧、隷従、墮落、搾取の度が増大するのであるが、また、たえず膨張しつつ資本主義的生産過程そのものの機構によって訓練され結集され組織される労働者階級の反抗も、増大する。資本独占は、それと共に、かつそれのもとで開花した生産様式の桎梏となる。生産手段の集中と労働の社会化とは、それらの資本主義的外被とは調和し得なくなる一点に到達する。外被は爆破される。資本主義的私有の最期を告げる鐘がなる。収奪者が収奪される。」

・資本主義は、自らの運動法則によって、不可避免的に社会主義に向かわざるをえない。資本主義的生産そのもののなかに社会主義への必然性が内包されている。

・念のためにいえば、このことは労働者階級が手をこまねいていても、自然に自動的に資本主義は社会主義へと移行するというのではない。

・ブルジョア階級は、この必然が労働者階級の実践によって担われ実現されることを何よりも恐れる。

・（ブルジョア階級との）たたかい（思想闘争、経済闘争、政治闘争）のなかでのみ（それがどんなに困難であっても）、社会主義への必然性はつらぬかれ実現されうるものであることを、片時も忘れてはならない。

超訳『資本論』 的場昭弘著 祥伝社

『資本論』をいったん遠くに放り投げた日本人は、いま再び拾い上げ、ページを開く必要にせまられている。

この書には、むきだしの資本主義が、驚くべき洞察で描かれている。資本主義の実態は、21世紀になっても何ら変わっていない。

「この収奪は、資本主義的生産自体の内在的法則の作用によって、資本の集中によって、実

現される。つねに一人の資本家が多くの資本家を滅ぼす。この集中とともに、つまり少数の資本家による多数の資本家の収奪とともに、ますます大規模になる協業的形態、科学技術の意識的な利用、土地の計画的利用、共同的にのみ使われる労働手段への労働手段の転化、結合された社会的活動の生産手段として使用されることで起きるすべての生産手段の節約、世界市場全体への世界の国民の組み入れ、およびそれとともに資本主義の国際的性格が発展する。

こうした転形過程のあらゆる利益を収奪し、独占する大資本家の数がたえず減少していくとともに、窮乏、抑圧、隷従、墮落、搾取の度が増大するのだが、一方でたえず拡大する資本主義的生産過程の機構そのものによって訓練され、結集され、組織される労働者階級の抵抗も増大する。資本の独占はそれによって、かつ、そのもとで開いた生産様式の障害になってくる。

生産手段の集中と労働の社会化は、そうした資本主義の枠と調和しなくなる点までに至る。そして、その枠は破壊される。資本主義的私有の最後を告げる鐘がなる。収奪者が収奪されるのだ。

資本主義的生産様式から生まれる資本主義的領有様式、つまり資本主義的私有は、自己の労働に基づく個人的所有の最初の否定である。しかし資本主義生産はある種の自然過程をもってそれ自身の否定をつくる。

それが否定の否定である。この否定は私有を復活させるのではないが、しかし、確かに資本主義時代の結果に基づいている。すなわち土地の協業と労働によって生産された生産手段の共有に基づいている。個人的所有をつくるのである。

当然ながら、個人の自己労働に基づく分散した私的所有の、資本主義的私有への転化は、社会的生産過程に基づく資本主義的所有の、社会的所有への転化に比べれば、比較にならないほど長く、過酷で困難な過程である。

前者では少数の収奪者による民衆の収奪が行われたのだが、後者の場合には民衆による少数者の収奪が行なわれるのである。」

- 資本主義が世界の津々浦々まで広がり、それが国家を超え独占を形成し、世界的な規模での労働運動が起こるようになる。

- 個別的所有というのは、否定の否定。

- 私的所有は、個人的労働による所有によって生まれ、やがてそれが資本主義的な労働に対する所有に変わり、再度それが否定され、社会的所有の中で個人的所有が復活するというわけである。

- すでに「共産党宣言」(1848年)の中で私的所有と個別的所有を区別しているのが、それが「資本論」の中でも一貫してつらぬかれている。

『高校生からわかる「資本論」』池上彰著（集英社）より

「一人の資本家が存在するためには多くの資本家が虐殺されるのである。この集中、もしくは少数の資本家による多数の資本家の財産収奪と並行して、労働プロセスにおける協同作業の形態が、たえず進んだ段階へと発展していく。同時にまた科学が意識的に技術へと応用されるようになり、地下資源が計画的に掘り出され、労働手段が協同でのみ利用できる形に変化し、協同の社会的労働の生産手段として利用されることによるあらゆる生産手段の経済化が進み、す

すべての民族が世界市場のネットワークに組み込まれ、それとともに巨大な資本制の国際的性格が発展する。巨大資本家はこうしてその数を減らしながら、この変容過程がもたらすいっさいの利益を奪い取り、独占していくのだが、それとともに巨大な貧困が、抑圧が、そして隷従と墮落と搾取が激しくなる。だがまた、資本制生産過程のメカニズムを通じて訓練され、統合され、組織化され、増加する一方の労働者階級の憤激も激しくなる。資本の独占は、それとともに、今度はまたその下で花盛りとなった生産様式そのものを束縛しはじめる。生産手段の集中は、そして労働の社会化は、ついにその資本制的な被膜と合わなくなるところまでくる。そしてこの被膜は吹き飛ばされる。資本制的私的所有の終わりを告げる鐘が鳴る。収奪者たちの私有財産が剥奪される。」

(筑摩書房刊マルクス・コレクションⅣ・Ⅴ『資本論』第一巻)

- 虐殺っていても、文字通り殺されるわけではない。
- 多くの企業が、競争する。たくさんの会社が負けて、次第に減。ある程度限られた大企業だけが残っていく。
- つぶれた会社の全部を他の会社が引き受ける。少数の資本家による多数の資本家の財産収奪だ。
- M&A。企業の吸収合併。いくつもの銀行が一緒になった。伊勢丹と三越が一緒になった。西武とそごうが合併し、セブン&アイ・ホールディングが子会社とした。
- 独占企業がそうになると、労働者たちも何千人もが一緒に働くようになる。
- 世界市場のネットワークとは、グローバル経済のことだ。
- 多数の労働者が何千人も協働。組織化と、組織的行動へ。労働組合運動が激しくなる。「最後の審判」が下る。
- 世界の終わり、最後の審判の日がくる。そのとき、この世の終わりを告げる鐘が鳴る。すると、すべての人が生き返り、神の前で、天国か地獄に行くか、審判される。
- その最後の審判の日がやがて来る、というユダヤ教、キリスト教的表現である旨。

いま生きる「資本論」 佐藤優著 新潮社

(本書は新潮講座「一からわかる『資本論』」第一期(2014年1月~3月)の講義を活字化したもの)

- 「資本主義的蓄積の歴史的傾向」
 - ある意味、ここは『資本論』で一番有名な個所です。
 - 次の(この)ブロックが……。……。マルクスがいちばん間違えているところです。
- 「この収奪は、資本主義的生産自体の内在的法則の作用によって、資本の集中によって、実現される。つねに一人の資本家が多くの資本家を滅ぼす。この集中と並んで、すなわち少数の資本家による多数の資本家の収奪と並んで、ますます大規模となる労働過程の協業的形態、科学の意識的技術的応用、土地の計画的利用、共同的にのみ使用されうる労働手段への労働手段の転化、結合された社会的労働の生産手段として使用されることによるあらゆる生産手段の節約、

世界市場網への世界各国民の組み入れ、およびそれと共に資本主義体制の国際的性格が、発展する。この転形過程のあらゆる利益を横領し独占する大資本家の数の不断の減少とともに、窮乏、抑圧、隷従、墮落、搾取の度が増大するのであるが、また、たえず膨張しつつ、資本主義的生産過程そのものの機構によって訓練され、結集され、組織される労働者階級の反抗も増大する。資本独占は、それと共に、かつそれのもとで開花した生産様式の桎梏となる。生産手段の集中と労働の社会化とは、それらの資本主義的外被とは調和し得なくなる一点に到達する。外被は爆破される。資本主義的私有の最期を告げる鐘がなる。収奪者が収奪される。」(カール・マルクス『資本論』)

・ 正統派のマルクス主義経済学者にとって、ここが『資本論』の中でもいちばん神聖な部分です。

・ 資本主義が発達していくと、資本家同士の間で競争が起きて、巨大資本だけが生き残るようになる。その巨大資本は、グローバル化の中で、少数の資本家が富を独占し、スーパーリッチが生まれてくる。その一方では、窮乏、抑圧、隷従、墮落、搾取がどんどんひどくなって、あらゆる場所で二極化が進んでいく。

・ そうなると、労働者は堪えきれなくなり、反抗し、団結し抵抗する。資本主義は行き詰る。大きな資本は、もはやその経済規模に対応することができなくなって、資本主義というシステムは爆破され、革命が起きる。

・ 資本主義的私有の最期を告げる鐘が鳴り、収奪者が収奪される。

・ かくて、共産主義革命が達成される。共産主義の世の中が来る。

・ そもそも、『資本論』第一巻末尾のこの宣言は論理的にナンセンスなのだと、最初から、宇野弘蔵は考えていました。

・ 資本主義が行き詰ることはあります。それは恐慌という形であらわれます。

・ 大量商品が生産されているのに、まったく売れない時もある。それがやがて恐慌に至ることもある。

・ すると、労働者に商品を買うカネがなくなり、貧困という状況は生じる。

・ しかし、そんなことはイノベーション、新技術の開発によって基本的に乗り越えていくことができる。

・ 労働者が窮乏化する必然性はない。

・ 資本主義は爆破されず、破壊もせず、あたかも永続するかのごとく、生き延びていくのだ、というのが宇野の考え方です。

「……………、労働者階級の『窮乏、抑圧、隷従、墮落、および搾取の度合』は、資本の集中、すなわち少数の資本家による多数の資本家の収奪にともなう大資本家数の減少につれてますます増大するが、それと同時に、生産手段の集中にともなう『労働の社会化』もすすみ、資本主義的生産過程そのものの機構によって『訓練され、結集され、組織される労働者階級の反抗も増大する』。したがって、このような反抗によって蓄積の法則は修正され、窮乏化の作用も緩和ないし制限されることになるが、資本主義的蓄積が、したがってまた資本主義的生産様式が存続するかぎりでは、窮乏化の必然的作用を排除することも止揚することもできない。」(カール・マルクス『資本論』)

※「労働者が窮乏化する必然性はない。資本主義は爆破されず、破壊もせず、あたかも永続するかのごとく、生き延びていくのだ」というのが宇野の考え方というが、マルクスは「窮乏化の

必然的作用を排除することも止揚することもできない。」といている。

『資本論』入門 岩波新書 向坂逸郎著

「……………この集中と並んで、すなわち少数の資本家による多数の資本家の収奪と並んで、ますます大規模となる労働過程の協業的形態、科学の意識的技術的応用、土地の計画的利用、共同的にのみ使用されうる労働手段への労働手段の転化、結合された社会的労働の生産手段として使用されることによるあらゆる生産手段の節約、世界市場網への世界各国民の組み入れ、およびそれと共に資本主義体制の国際的性格が、発展する。この転形過程のあらゆる利益を横領し独占する大資本家の数の不断の減少とともに、窮乏、抑圧、隷従、墮落、搾取の度が増大するのであるが、また、たえず膨張しつつ、資本主義的生産過程そのものの機構によって訓練され、結集され、組織される労働者階級の反抗も増大する。資本独占は、それと共に、かつそのもとで開花した生産様式の桎梏となる。生産手段の集中と労働の社会化とは、それらの資本主義的外被とは調和し得なくなる一点に到達する。外被は爆破される。資本主義的私有の最期を告げる鐘となる。収奪者が収奪される。」

(カール・マルクス『資本論』)

これは、『資本論』「資本主義的蓄積の歴史的傾向」の一節である。

『資本論』は「近代社会の経済的運動法則」を明らかにする。しかし、この経済的運動法則は、経済的メカニズムの同一規模の繰返しではない。それは、資本主義的蓄積の一般的法則が示すように、資本の集積と集中というように、量的な運動が、堆積されている。単なる繰返しではなく、量の蓄積である。一つの運動であり、変化である。したがってまた発展である。

資本の集積、集中とともに、資本主義のもっている内在的な矛盾も発展する。資本の発展、物質的生産力の発展は、資本の有機的組成の高度化となり、働く人間の生活を不安定にし、彼らの生活が奪われる機会の増大となる。労働者階級の数は大きくなる一方であるが、この人々の生活は、ますます不安となる。資本は、高度に発達した技術を利用し、高度に便利であり、文化的である生産物をつくり出すにもかかわらず、これを利用し、消費することのできない人間の数は増大する。人間の幸福のためにある筈の科学技術は、人間の不幸の原因に転化される。

他方資本主義的鉱工業、交通通信業等々の発達には、働く労働者を組織化する。本来これらの近代的大産業は、技術的性質からいって、組織的であり、有機的に結合している。近代的労働者は、このように朝から晩まで、有機的に相互に関連する職場で働いている。だから、「この転形過程のあらゆる利益を横領し独占する大資本家の数の不断の減少とともに、窮乏、抑圧、隷従、墮落、搾取の度が増大するのであるが、また、たえず膨張しつつ、資本主義的生産過程そのものの機構によって訓練され、結集され、組織される労働者階級の反抗も増大する。」

マルクスは資本の論理を追求することによって、資本主義発達の限界を明らかにすると同時に、資本主義の量的発展が、質的飛躍とならざるをえない条件を明白にしている。

このような資本主義発展の法則を認識することは、歴史をつくる人間の行為に与えられた歴史的条件を知ることである。法則の必然を自由なる歴史的行為に転化されることが待たれている。

「あらすじとイラストでわかる資本論」 知的発見！探検隊編著 文庫ざんが堂

- マルクスが見る資本主義の末路。
- やがて強い資本は弱い資本の吸収・合併をくり返し、国境を越えて資本を巨大化していく。
- どんどん広がる資本は、労働者の数も増やし、それは労働者にも力を与えていく。
- やがて労働者たちの力は爆発して革命が起こる。
- 膨れすぎた資本は労働者たちによって社会化される。

「漱石と『資本論』」 祥伝社新書 小島英俊・山崎耕一郎著

「あらゆる利益を横領し独占する大資本家の数の不断の減少とともに、窮乏、抑圧、隷従、墮落、搾取の度が増大するのであるが、また、たえず膨張しつつ資本主義的生産過程そのものの機構によって訓練され結集され組織される労働者階級の反抗も、増大する。資本独占は、それとともに、かつそれのもとで開花した生産様式の桎梏となる。生産手段の集中と労働の社会化とは、それらの資本主義的外被とは調和しえなくなる一点に到達する。そして外被は爆破される。資本主義的私有の最期を告げる鐘が鳴る。収奪者が収奪される。」

（カール・マルクス『資本論』）

この最後の文章は、日本のマルクス経済学者やマルクス主義者を強く刺激し、興奮させ、これこそマルクスの究極のメッセージとして受け止められた。

しかし、「資本論」は、政治的行動を促すアジ演説ではけっしてなく、資本主義経済の矛盾を理詰め解こうとした書である。

- 資本主義の発展とともに「窮乏、抑圧、隷従、墮落、搾取の度が増大する。」
- しかしそれと同時に「たえず膨張しつつ資本主義的生産過程そのものの機構によって訓練され結集され組織される労働者階級の反抗も、増大する。」
- そしてその結果、資本主義的私有制度が廃棄され、社会主義への展望が開かれることになる。

「資本主義的蓄積の歴史的傾向」

あらゆる利益を横領し独占する大資本家の数の不断の減少とともに、窮乏、抑圧、隷従、墮落、搾取の度が増大するのであるが、また、たえず膨張しつつ資本主義的生産過程そのものの機構によって訓練され結集され組織される労働者階級の反抗も、増大する。資本独占は、それとともに、かつそれのもとで開花した生産様式の桎梏となる。生産手段の集中と労働の社会化とは、それらの資本主義的外被とは調和しえなくなる一点に到達する。外被は爆破される。

資本主義的私有の最期を告げる鐘が鳴る。収奪者が収奪される。

「『資本論』を学ぶ人のために」 平野喜一郎著

(・平田喜久雄さんの著書だと間違えて、図書館から借りた。)

*資本主義の終わり——資本主義的蓄積の歴史的傾向

「資本主義の最後」は、実際の生産者が、生産手段を資本家から取り返すことによって実現する。

・一つの資本家が労働者を搾取して、それ自身の資本規模を拡大することを「資本の集積」という。

・巨大な資本を集積した少数の資本家は、多数の資本家を収奪しつつし、打ち滅ぼす。これを「資本の集中」という。

・これによって、生産の社会化が進む。・「労働過程の協業化」「労働手段の協同化」「結合された労働による生産手段の節約」が進む。

・資本主義的生産過程には、労働過程と価値増殖過程の二つの側面がある。前者では労働の社会化が、後者では資本の独占化が進むのである。

「貧困、抑圧、隷従、墮落、搾取の総量は増大するが、しかしまた、絶えず膨張するところの、資本主義的生産過程そのものの機構によって訓練され結合され組織される労働者階級の反抗も増大する。資本独占は、それとともにまたそれのもとで開花した、この生産様式の桎梏（しっこく＝手かせ足かせ）となる。

生産手段の集中と労働の社会化とは、それらの資本主義的な外被とは調和しえなくなる一点に到達する。この外被は粉碎される。資本主義的私的所有の弔鐘（ちょうしょう＝人の死をいたんで打ち鳴らす鐘）が鳴る。収奪者が収奪される。」

*資本主義は、自己労働による農民の個人所有を否定することで成立した。

・ところが、資本主義の発展は、いまや資本主義的所有の否定の条件をつくりだす。

・それは「否定の否定」の弁証法だ。

・二度目の否定で、最初に否定された個人的所有が再建される。

・しかし、再建と言っても最初に否定された生産者の個人所有の同じ形と規模の、元にもどした再建ではない。

・「生産者たちの所有」は、資本主義時代の成果である、労働過程の社会化を基礎に、社会的・共同的所有として、再生するである。

*切り離されていた生産者たちと生産手段は、ふたたび結びつく。

・「否定の否定」は、「私的所有を再建するわけではないが、しかし、資本主義時代の成果——すなわち、協業と、土地の共有ならびに労働そのものによって生産された生産手段の共有——を基礎とする個人的所有を再建するのである。

・（最初の否定、つまり）本源的蓄積は長く、苦しい、困難な過程であった。

・二度目の否定は、より短く、喜ばしく、より容易な過程である。

・本源的蓄積期には少数の横奪（無理に奪い取ること）者による人民大衆の収奪が行なわれたが、資本主義の終わりには、人民大衆による少数の収奪者の収奪が行われる。

・社会的所有の条件である生産の社会化が、すでに完了しているからである。